

京

に

眠

る

所縁の寺と墓所をゆく
戦国武将編

所
縁
の
寺
と
墓
所
を
ゆ
く
戦
国
武
将
編

京
に
眼
る



大
義
芳



目
次

明智光秀	6	豊臣秀長	136
安国寺惠瓊	10	豊臣秀吉	140
石田三成	14	鳥居元忠	144
大久保彦左衛門	26	古田織部	168
織田有楽斎	30	細川忠興	172
織田信長	34	松永久秀	180
片桐且元	38	三好長慶	200
加藤清正	54	山内一豊	208
蒲生氏郷	70	六角承禎	216
小早川秀秋	74	脇坂安治	220
斎藤利三	78	卷末付録	225
佐々成政	82	戦国年表	226
真田幸村	86	戦国武将生没年表	234
島左近	110	戦国合戦録	238
田中吉政	118	参考文献	245
長宗我部盛親	122		
豊臣秀次	134		

明智光秀

あけち
みづひで



■生年：1528年（享禄元）
■没年：1582年（天正10）
従五位下。惟任日向守。

首塚：東山区三条白川橋



胴塚：山科区勤修寺下ノ茶屋町



明智光秀の首塚：東山区三条白川橋

主君信長との確執から、京都本能寺を襲い信長を自刃させた。この原因については諸説あるが、やはり從来から言われるように、積年の恨みと中国攻めの秀吉の援軍という屈辱による突発的な犯行だろう。京都を掌握した後、姻戚関係にある細川藤孝・忠興（※1）父子の合力を得られず、光秀の組下（寄騎）である大和の筒井順慶も加担しなかった。単独で秀吉連合軍を迎撃つ形となり、結果的に大敗して滅亡に至る。こうした動きを見ても、周到な根回しや準備のない行動だったと思われる。

光秀の出生は明らかではないが、「明智軍記」によれば、美濃土岐氏の一族で、美濃明智荘の明智光綱の子として享禄元年に生まれた。斎藤道三に仕えていたが、子の義龍との対立で道三が破れ、明智城も落城し一族のほとんどが殺された。光秀は城から落ちて、母方の若狭武田氏を頼り、後に越前の朝倉氏に仕えたという。光秀の30歳頃のことである。この時、京都で松永久秀らに將軍足利義輝が殺されると、興福寺一乗院門跡となっていた弟の覚慶（義昭）は、細川藤孝（幽斎）に助けられ大和から脱出して朝倉義景を頼った。これを契機として、光秀は藤孝と親交を結び、義昭を將軍に擁立するために動きだす。

朝倉義景が動かない見定めると、尾張、美濃を平定した織田信長に懇請。信長にとっても上洛への大義名分が立ち、両者の目論みが一致。翌年の1568年（永禄11）に信長は義昭を奉じて入洛を果たし、義昭を15代將軍に就けた。光秀は、これを契機として信長に重用されるようになり、ようやく歴史の表舞台に立った。

やがて信長と義昭が不和となり、対立が決定的となると藤孝とともに信長の直臣となる。その後、信長の天下布武の戦に従軍して、しだいに頭角を現す。1571年（元亀2）の比叡山焼打ちの後、近江坂本5万石の城主となる。信長軍団にあって主に近畿平定を中心に転戦して、1579年（天正7）には丹後・丹波を平定し、丹波29万石を与えられ計34万石の大身代となり、丹波亀山城・横山城・周山城を築城した。

1582年（天正10）に甲斐の武田勝頼を滅ぼした信長は、同盟者である家康の慰労のために安土城に招待した。その接待役に任じられたのが光秀で、連日連夜趣向を凝らして家康一行を饗応していた。時を同じく、中国攻めの秀吉から援軍の要請が届くと、信長は光秀の接待役を罷免して備中への援軍を命じた。

光秀は自軍を丹波亀山城（亀岡市）に集結させた。5月27日、光秀は嫡男の光慶を伴い愛宕山に登り、愛宕権現と軍神勝軍地蔵に戦勝祈願をして愛宕社に宿泊。翌日に愛宕西之坊威徳院（※2）で開かれた連歌会に参加した。「ときは今天が下する五月哉」で有名な光秀の発句に始まり、主催者の行祐、そして里村紹巴（※3）と続き、後にいう「愛宕百韻」（※4）が詠まれた。光秀の謀反は、この愛宕権現参詣で決定したと

光秀の墓石

明治36年（1903）、光秀を演じた歌舞伎役者の市川団蔵が墓石を建てたという。「長存寺殿明窓玄智大禪定門」と刻まれている。



光秀の頭蓋が祀られた祠

※1 細川忠興：光秀の娘、玉（後のガラシャ）が忠興の室となっていた。

※2 愛宕西之坊威徳院：住職が光秀と親交の深かった行祐。

※3 里村紹巴：1525年（大永5）～1602年（慶長7）。大和出身で始め松井姓だったが、後に里村昌休に連歌を学び、里村家を継いだという。戦国時代に連歌は戦勝祈願の一環として武将に漫透していくため、三好長慶をはじめ信長、明智光秀、細川幽斎、島津義久などの有力大名との交流を深め、連歌界の第一人者までになる。

門弟に後の俳諧の祖となる松永貞徳がいる。

※4 愛宕百韻：光秀が15句、紹巴18句、行祐11句など9名の出席者の合計が100句となっている。



愛宕神社石段



愛宕神社の本殿



激戦が繰り広げられた山崎の地
(天王山よりの遠望)

いわれるが、それでは大事にしては早急過ぎて信じ難い。この以前の 10 日ほどの光秀の動静がまったく不明であり、おそらく坂本城で重臣らと連夜の戦評定で決したのだろう。

亀山城に戻った光秀は、信長の上洛を確認した 6 月 1 日の夕方、全軍に出陣命令を下した。老ノ坂を越えた里村で小休止の後、ゆっくりと丹波口を目指して進軍、桂川を前に全軍に下知。翌日の早晚に本能寺を襲撃して信長を殺し、二条御所に籠った信忠も自刃させた。すぐさま京都、近江を平定したが 6 月 7 日には、中国攻めの秀吉軍が姫路城に帰還した報せを受けた。秀吉の迅速な行軍は、光秀の予想をはるかに越えるものだった。光秀は自身の寄騎である大和の筒井順慶、丹後田辺城の細川幽斎父子らに出陣を要請するが、すべて拒否されて孤立した。

明智軍 1 万 5000 は秀吉連合軍に比べ半数にも満たない兵力だった。6 月 11 日、光秀は秀吉軍の進軍経路を宇治川と桂川に挟まれた要衝の鳥羽街道と読み、下鳥羽（※5）に布陣した。しかし翌日になって、秀吉軍は摂津富田から山崎へ進軍することが決定されていた。6 月 13 日は朝から雨が降り出していた。秀吉軍の先鋒は天王山とその麓の山崎を占領、西国街道と淀川沿いに進出して全軍 3 万 5000 が布陣した。

光秀は、その日の午後になってようやく、桂



勝龍寺城跡：公園として整備されている

※5 下鳥羽：現在の京都南インターチェンジ付近。大坂から淀、下鳥羽から東寺に至る京都の玄関口にあたる。

※6 勝龍寺城：もとは室町時代後期に嵐山義就が郡代役所として築城したとされる。戦国時代に入って、松永久秀などの属城を経て信長の畿内平定で、細川幽斎に与えられた。一説には、嫡子忠興と光秀の娘玉と結婚式を挙げ、丹後を領するまでの居城だったという。現在、発掘調査後、石垣など一部を模して公園として整備されている。



明智藪：伏見区小栗栖小坂町
襲撃された藪とされる碑（左）。
この周辺は、今では住宅が建ち並び、
藪はわずかしか残されていない。

川を渡河して長岡の勝龍寺城（※6）に移動した。秀吉の本隊が山崎に到着すると、光秀も全軍を進めて対峙した。陽が天王山に傾き掛かる頃、その麓で銃声が響きわたり合戦が始まった。明智の並河帰部や斎藤利三らが死を賭して奮戦するも、衆寡敵せず中央戦線を突破され、名立たる将兵のほとんども討ち死にした。光秀は一旦勝龍寺城に退却して体勢を立て直そうとするが、時間とともに敗戦が明らかとなり夜陰に紛れて城を落ちた。

光秀は近江の坂本城での再起にかけ、桂川を渡り淀から伏見の大龜谷の山中を急いだ。小栗栖の竹藪に差掛かると、突然、藪の陰から鎗が飛び出し、馬上の光秀は脇腹を鋭く貫かれた。数人の農民だった。馬首を持つ溝尾庄兵衛尉が、そのうちの一人を切り捨てる逸散に逃げた。庄兵衛は馬を引いて先を急ぐが、光秀は落馬した。光秀はすでに自らの命運の尽きたことを悟り、庄兵衛に人知れず自分の遺骸を隠すよう下命して自刃して果てた。

庄兵衛は主人の首を落とし、胴体は近くの藪の中に埋葬（※7）した。首を持って京の知恩院近くまで来たが、夜明けとなつたため、この地に埋めたと伝わる。また、一説にはその首は秀吉の首実検の後、栗田口に晒され栗田口黒谷通の東に埋められていたが、明和 8 年（1771）になって光秀の縁者が、自宅であったこの地に埋葬したともいわれる（※8）。

※7 脊塚：山科区勧修寺御所内町

昭和 45 年に地元の方によって建てられた。地下鉄東西線の小野駅から府道 35 号線を西へ、山科川を渡り信号を南へ左折する。250m ほど行くと西側に米の自販機が数台設置した場所があり、その一角にブロック塀で囲った中に石碑がある。



※8 「京都の墓碑めぐり」
竹村俊則著：京都新聞社より

安国寺惠瓊



■生年：不祥

1537年(天文6)と1539年(天文8)説がある

■没年：1600年(慶長5)

墓所：建仁寺／東山区小松町



墓所：建仁寺（法堂から本坊を望む）

永禄年間に安芸の安国寺の住持となってから、毛利氏の外交僧として台頭する。毛利と大友両家の和平交渉を皮切りに、信長と義昭の調停、特に秀吉の中国征伐に対して毛利氏との講和交渉で尽力した。信長後、秀吉が権勢を振るいだすと毛利氏との領国問題にも奔走。この外交手腕を秀吉に買われて信任されるようになる。秀吉の天下統一とともに出世して、伊予国和氣郡2万3千石と北九州、安芸安国寺にも知行が与えられ、僧侶にして大名となつた。

惠瓊の出自については明確な記録がなく、生年も1537年(天文6)と1539年(天文8)説がある。幼名は竹若丸と称し、父は安芸の守護武田元繁の甥である信重とされるが、同じく元繁の娘婿の伴繁清説もある。1541年(天文10)、武田氏の居城が毛利元就の攻略によって落城した際、落ち延びて安国寺に逃れて仏門に帰依した。

12年にもおよぶ修行の後、1553年(天文22)に京都へ上り臨済宗本山の東福寺に入り、塔頭退耕庵主となっていた竺雲恵心(※1)の弟子となる。恵心は、もと毛利家の菩提寺興禪寺の住職であり、京都にあって畿内の情報に精通しており、毛利元就の外交を任せられていた。以後、恵心のもとで、禅林修行とともに毛利氏の外交交渉にも同席するようになる。

1569年(永禄12)、安国寺の住職となって安芸に戻り、安国寺惠瓊と名乗るようになった。この頃より恩師恵心の亡き後の毛利家の外交僧としてその名を知られるようになり、翌年の元亀元年には、元就の宿敵だった豊後の大友宗麟との和睦を取りまとめた。また同3年の備前出兵では、播磨の宇喜多直家を降伏させるなどの外交手腕を発揮している。毛利家は元就の没後、孫の輝元が当主となつたが、叔父の吉川元春(※2)と小早川隆景(※3)の補佐に支えられて中圧10カ国の覇者となつた。

しかしその同時期、尾張の織田信長が急速に勢力を伸ばし、毛利の領土を侵食し始めていた。1582年(天正10)4月には、中国方面軍の総大將羽柴秀吉が備中高松城を包囲した。高松城主の名将清水宗治は、秀吉の投降を一蹴して籠城、一步も引かない抵抗を示した。5月に入り、秀吉は本陣を石井山に移すと配下の武将を高松城周辺の山々に配置し、足守川と周辺の河川を堰止め、全長3キロに渡る堤防を築かせた。そして堤が出来上がり、堰を切ると城の周囲の湿地帯は次第に水浸しとなり、まるで湖のように変貌した。世に言う、水攻め(※4)である。この時期は梅雨にあたり、連日の雨とともに高松城は完全に水没、孤立無援となつた。高松城救援の毛利軍も、もはや手を挙げばかりであった。

この時、京都本能寺では秀吉の援軍要請に出馬していた信長が、明智光秀の謀反によって殺された。6月3日、偶然にも光秀の毛利宛の密書を手に入れた秀吉は、前日からの講和を急がせた。この交渉にも惠瓊が担当しており、条件の難題は領土よりも宗治の死であった。輝元は、毛利に忠誠を尽くす宗治の命と引き換えの講和に、どうしても首を縊に振る事ができない。

惠瓊は、いま織田軍と戦う不利を説き、宗治にも意見を聞くことで輝元を承諾させた。宗治



本坊から潮音庭を望む



潮音庭

中心の3つの石が、四方のどこから見ても正面に見えるように工夫された枯山水の庭。

※1 竹雲恵心(じくうんえいしん)：生年などは不祥。安芸吉田興禪寺の住職。立雪斎。後に東福寺213世住持となる。

※2 吉川元春：1530年(享禄3)～1586年(天正14)。毛利元就の2男で安芸山県郡の豪族吉川興経の養子となり吉川家を相続。弟の小早川隆景とともに、毛利家を補佐して毛利の両川と称された。隆景に反し秀吉の配下となるのを嫌い、家督を長男元長に譲り隠居した。すぐに復帰して秀吉の九州征伐に出陣したが小倉で病没。

※3 小早川隆景：1533年(天文2)～1597年(慶長2)。毛利元就の3男。安芸竹原の小早川家を相続。秀吉の政権下でも毛利家を守立て活躍した。文禄4年(1595)に秀吉の猶子秀秋に家督を譲って隠居、慶長2年に備後の三原城で没した。勇将でありながら知謀にも長け、戦国時代きっての知将といわれる。

※4 水攻め：土俵一俵につき米一升と銭100文で買い取ると隣に触れを出し、農民たちにも土木工事を手伝わせ、約12日間で堤防を完成させたという。



方丈の裏庭から恵瓊の首塚を望む



今も静かに眠る恵瓊

※5 吉川広家：吉川元春の3男。兄元長の病死で家督を相続。関ヶ原戦では、西軍の毛利秀元を補佐して南宮山に布陣したが、参戦しなかった。このため、安国寺恵瓊や長宗我部盛親軍も動けなかったとされる。

※6 七将：加藤清正、福島正則、細川忠興、蜂須賀家政、藤堂高虎、黒田長政、浅野幸長。いずれも秀吉子飼いの武将で、文治派の三成とは常に対立しており、特に文禄・慶長の役で三成は諸将の戦ぶりを秀吉に報告する役目であった。諸将にとって不利な報告であれば、三成の讒言と捉え憎悪していた。

は、城内に籠る家臣や農民の助命を条件に要求に従った。翌日に宗治主従の自刃を見届けた秀吉は、直ちに毛利との和睦を成立させ、両軍は撤退を始めた。秀吉が撤退した後、信長の死を知った毛利は、吉川元春らが追撃を主張したが、恵瓊や小早川隆景が反対して安芸に退陣した。

その7日後、秀吉は「中国大返し」によって京都郊外の山崎で光秀を討ち、翌年4月には賤ヶ岳において柴田勝家軍を粉碎、越前に攻め上つて勝家を滅ぼした。秀吉は、次々と領土を拡張して信長の後継者として君臨し始めた。

恵瓊の予感は適中した。この以前の天正元年（1573）、信長が將軍義昭を追放した頃、毛利の使者として信長、秀吉に接した恵瓊は、その感想を書状に認め毛利家の家臣らに送っている。「信長の代は3年や5年は続くが、自ずと転落するだろう。だが家臣の藤吉郎は並の者ではない。」この真贋は解らないが、恵瓊の先見性や交渉能力を示すものとしてよく知られている。

結局、毛利は1585年（天正13）に秀吉に屈し、吉川広家（※5）と小早川秀包を人質として大坂城の秀吉の元に送った。この恵瓊の交渉力が秀吉に認められ、四国征討後には、小早川隆景に与えられた伊予35万石のうち、和気郡に2万3千石を受領、僧侶にして大名の地位を得た。その後も秀吉の九州平定では検使を果たし、関東の小田原攻めでは武将として参陣、他の大名とともに城を一つ落としている。文禄・慶長の役には豊臣家の奉行の一人として朝鮮に渡海、占領地の支配も行っている。

1598年（慶長3）の8月、秀吉が没すると天下は急激に動き出した。徳川家康の専横とそれに対抗する奉行の石田三成の確執だった。それは翌年の前田利家の病没で一気に浮上し、豊臣恩顧の七将（※6）が三成に対する積年の恨みから暗殺未遂騒動を起こし、家康の裁定で三成

は奉行職を解かれ佐和山に蟄居させられた。

1600年（慶長5）に入ると、上杉景勝の謀反の噂が浮上。家康は景勝に再三上洛を促したが応じず、秀頼の名代として上杉征伐を全国の大名に下知した。6月16日、家康も大坂城を發して会津に向かった。

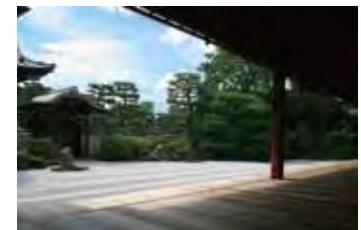
三成はこの機を待っていた。親友の大谷吉継に胸の内を吐露して味方に付け、吉継の助言により、秀頼を旗頭に毛利輝元を大将に担ぐため恵瓊に密書を送った。恵瓊は、秀吉の恩顧と毛利躍進のために同意して佐和山城へ入った。恵瓊を加えた三成らは、上杉家の重臣直江兼続、宇喜多秀家、小早川秀秋、島津維新、真田昌幸らに打倒家康への合力を依頼、同時に全国の諸大名に家康弾劾の13か条の檄文を送った。

下野小山に布陣していた家康は、伏見城を包囲された鳥居元忠から西軍挙兵の報せを受けると、すぐさま軍議を開き、諸将の参戦を確かめて上方に向けて軍を発した。伏見城を落とした西軍は、北陸、丹波、伊勢、美濃方面の家康方を攻略していたが、東軍の岐阜進出に対して関ヶ原付近へ集結した。こうして、9月15日に入り天下分け目の戦が始まった。

圧倒的に有利な陣形の西軍は、南宮山の毛利軍の不戦と小早川軍の裏切りによって壊滅して敗走。大谷隊は奮戦するも全滅、吉継は自刃。三成は伊吹山中に潜伏していたが捕えられた。恵瓊も毛利軍の後方に出来ましたが、戦わずして逃走。京都に隠れていたが捕縛され、三成、小西行長とともに京の六条河原で斬首された。

恵瓊の首は、建仁寺の僧侶たちが持ち去り、方丈の裏庭に手厚く葬った。建仁寺は長く荒廃していたが、恵瓊が安国寺（不動院）（※7）方丈を移築するなど復興に尽力していたため、その恩義へのせめてものの報いだった。今も同じ場所で静かに眠っている。

建仁寺：栄西禅師が開山した臨濟宗建仁寺派大本山。1202年（建仁2）に源頼家の寺域の寄進によって栄西が創建。その後、火災や戦乱によつて何度も荒廃と復興が繰り返された。天正年間（1573年～1592年）に安国寺恵瓊が方丈や仏殿を移築して復興が始まり、後の徳川幕府によつて整備された。



建仁寺方丈（重要文化財）と前庭の大雄苑（だいおうえん）



大雄苑に建つ「信長の供養塔」：恵瓊が信長の供養のために建てたもの。

※7 安国寺（不動院）：広島市東区牛田新町にある真言宗の寺院。もと足利尊氏が全国に造立した安国寺の一つ。恵瓊が入って金堂、楼門、鐘楼、方丈、塔頭十二院などを復興整備した。恵瓊の没後に荒廃したが、宥珍が住持となり禪宗から真言宗に改宗して不動院と称した。

いじだ みつなり 石田三成



■生年：1560年（享禄3）
■没年：1600年（慶長5）

従五位下。治部少輔。

戒名：
江東院正軸因公大禪定門

墓所：大徳寺三玄院



墓所：妙心寺寿聖院



石田三成の墓所：大徳寺三玄院（北区紫野大徳寺町）

歴史はつねにその時代の為政者によって創られ、その敵対者は悪者にされ、葬られる運命にある。石田三成は、その代表格といってよい人物だ。武士権力による最後の幕府を布いた徳川家康に楯突いた男だから、その実像は歪められ、痕跡は徹底的に破壊された。三成は永い間、豊臣政権を篡奪しようとした奸臣で極悪人というイメージをもたれていたが、近年になってようやく実像が明らかになりだしている。

石田家は、もと京極氏の被官だったが、後に浅井氏が台頭して湖北地方を收めると、その下で近江坂田郡石田村（現：滋賀県長浜市石田町）の支配を任せられたようだ。三成は、石田藤左衛門正継の次男として、まさに戦国時代真っ直中の1560年（永禄3）に生まれた。信長が桶狭間において今川義元を討った年と同じで、秀吉もまだ若き24歳だった。

秀吉との出会い

三成といえば、必ず語られるのが秀吉との出会いを収めた、碎玉話の「三杯の茶（三献茶）」（※1）の逸話だ。三成が秀吉に仕えたのは、天正元年から翌年（1573～74）の頃といわれるが、それ以前の幼少時のこととは全く解らない。しか

し、この時代豪族の次男であれば、家の菩提寺か近所の寺に学問修行に出されるのはごく当たり前のことであり、三成もおそらくどこかで修行していたのは確かであろう。その出会った寺も、今では石田家の菩提寺であった観音寺（※2）が通説となっている。この話の信憑性はともかく、秀吉が長浜城主となった頃は、主君の信長は天下人に最も近く、一人でも多くの家臣を求めていた。この時代、滅ぼした家の遺臣を召し抱えることはよくあることで、三成の父正継が、この地の有力者であれば当然秀吉に従属し、その子を召し出すのも自然の成り行きと考えられる。

三成は近習として秀吉に仕え、秀吉の出世とともにしだいに側近として頭角を現した。1582年（天正10）に信長が本能寺で討たれると、秀吉はすぐさま明智光秀を倒滅、翌年には賤ヶ岳で宿敵柴田勝家を破って滅ぼし、天下取りに動き出した。この賤ヶ岳合戦の勝敗も、秀吉軍のスピードで決った。三成はこの時の先発隊として、大垣から木之本までの街道に松明と握飯を用意し、秀吉軍の進軍を助けたといわれる。また、三成は先懸衆として、合戦にも参加したことが「一柳家記（※3）」に記されている。この頃に秀吉は山城検地（※4）を実施して京都周辺の石高を算出している。これは三成の発案ともいわれ、検地奉行として手腕を發揮。同時に北陸平定のために上杉との同盟交渉に直江兼続（※5）を通じて景勝に謁見するなど、軍事よりも政務や外交面でその才能を開花させている。

1585年（天正13）、秀吉は四国の長宗我部元親を下した後に関白に就任、三成も従五位下治部少輔を叙任された。翌年には九州にも兵を進め、三成は兵站奉行の一人として見事な采配を見せる一方で、戦乱で荒廃した博多の復興も果たした。また降伏した島津義久を秀吉に斡旋し、



秀吉と出会った観音寺



参道の山裾にある「水汲みの井戸」

※1 碎玉話（武将感状記）：熊沢淡庵が1716年（正徳6）に発行した武将の行状記。碎玉話ともいう。鷹狩に出かけた秀吉が、観音寺へ休息に立ち寄った際のエピソード。寺小姓だった佐吉（三成の幼名）が、秀吉の所望に対して一杯目は温い茶を大目に出し、二杯目は少し熱くした適量の茶、三杯目に熱い茶を少量にして出した。秀吉がその機転の利く才能を見出し、小姓に取立てたという話。

※2 観音寺：正式名を伊富貴山観音護国寺という。坂田郡山東町朝日にある天台宗の寺院。本堂は重要文化財に指定。参道脇に三成が秀吉の茶に使った水汲みの井戸がある。

※3 一柳家記（ひとつやなぎかき）：秀吉の家臣で美濃の一柳直末（ひとつやなぎ・なおすえ）と弟の直盛の武功記。「其時之先懸衆ハ大谷桂松、石田三成、片桐助作、平野権平、奥村半平、福島市松、同与吉郎、大島茂金衛、一柳次郎、同四郎右衛門、稻葉清六以上拾四人～」

※4 山城検地：後の太閤検地の最初であり、従来の荘園制度を改めて農地を実測して石高を算定。農民や耕作者の名前を検地帳に記載して納税者を確定した。



石田屋敷跡：滋賀県長浜市石田町



三成産湯の井戸：

石田屋敷跡から北へ 200m ほど行った場所にある。当時は屋敷内だった。

※5 直江兼続：1560 年（永禄 3）～1619 年（元和 5）。長尾政景の家臣樋口兼豊の嫡男。上杉謙信没後の後継者争いで、景勝の側近として勝利に導いた。その後、直江家を相続して上杉家の重臣として活躍。秀吉の台頭で景勝とともに臣従、景勝が会津 120 万石に転封の際、米沢 30 万石を与えられた。関ヶ原戦では、三成方に加担して敗北。戦後、上杉の処遇に奔走して米沢 30 万石の減封に留めた。

※6 五奉行：豊臣政権の五大老五奉行制度。豊臣秀頼が成人するまで、政権運営を合議制で行うために秀吉が晩年に組織した。一説によれば、秀吉の死の直前に制定されたともいう。

島津家の所領安堵のために尽力している。1590 年（天正 18）、秀吉は小田原の北条氏を降し、奥州地方も平定してほぼ天下統一を成し遂げた。

1591 年（天正 19）は、秀吉と豊臣政権の絶頂と同時に翳りが見え始める年だといえる。1 月に秀吉の異父弟の秀長が病没、2 月に利休を自刃させると、8 月には秀吉の子鶴松も夭折し、秀吉の落胆は尋常ではなかった。翌年の 1992 年（文禄元）には全国の諸大名に朝鮮への出兵を号令し、慶長 3 年に秀吉が没するまで 7 年間に亘って血みどろの戦争が繰返された。この間、文禄 2 年に秀頼が誕生すると、秀吉は閑白職を譲っていた甥の秀次を冷遇するようになり、2 年後には謀反の罪で高野山に追放して切腹させた。さらに悲惨だったのが、一族郎党を三条河原で打首に処し幼児など 39 名が犠牲になった。また文禄・慶長の役の際、加藤清正と小早川秀秋が秀吉の叱責を受けて召還され、それぞれ蟄居と左遷されるということが起こった。

この秀次事件と一連の秀吉の仕置きがすべて「三成の讒言」とされ、武功派の武将と決定的に対立することになった。さらに、秀吉の死で朝鮮から撤退した諸将には、何一つの恩賞も無かった。三成も大谷吉継や増田長盛らと軍監として渡海、実戦にも参加している。しかし、飢餓と極寒の中で命を賭けて戦った諸将たちには、三成らは秀吉の威を借りて後方の安全地帯で安穩としているしか見えなかつた。また、秀吉の天下統一後、戦争が無くなり武功派の猛者たちの仕事は少なく、領国經營という新たな不得意な仕事を抱えた。反対に三成や前田玄以、増田長盛、長束正家らの五奉行（※6）が行政官として重く用いられる背景もあった。三成らは秀吉の命令を忠実に実行したもので、何の落ち度もない。不満は、当然のように奉行の筆頭であった三成に向けられた。

三成と家康の対立

秀吉の死は、天下に新たな動きを見せ、これをいち早く感じたのが三成だった。徳川家康が豊臣政権の篡奪をはかり、秀吉の遺言を公然と破り始め、阻止しようとする三成との戦いが始まった。三成は自身の小身をよく知り、五大老の前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝をして家康を牽制した。だが、翌年の正月に豊臣家の求心役だった前田利家が病没すると、豊臣の武功派が三成の暗殺を計画。大坂の屋敷に居た三成は、日頃から親交のある佐竹義宣の報せを受けて、襲撃直前に伏見城内の屋敷へ逃れた。一時、伏見城は騒然となつたが、家康が仲裁に入って収めたために事無きに終わった。この豊臣の内紛によって三成は佐和山城に蟄居、武功派の武将は家康に抱え込まれた。

この後、家康は大坂に居た諸将を帰国させると、大坂城西の丸に入つて一切の政治を執行した。そして 1600 年（慶長 5）に入ると、家康のもとに上杉謀反の報せが寄せられた。家康は再び三にわたり景勝に上洛を促すが、重臣の直江兼続が主君に変わって返書を送つた。後の「直江状」（※7）といわれる 15 か条からなる家康に対する弾劾文が書かれていた。読んだ家康は激怒し、ついに 6 月、会津征伐の動員令を発した。6 月 16 日、家康は大坂城を進発して伏見城に入り、その後ゆっくりと東上して、江戸城に到着したのが 7 月 2 日のこと。

三成は蟄居してから、この時期までの動向はまったく解っていない。その動きが始めて見えるのが、家康が江戸に戻った同じ頃、大谷吉継（※8）に対する佐和山への来城要請だった。三成と吉継は無二の親友だったといわれ、二人の友情を物語るエピソードも多く残されている。吉継は、会津出陣のため越前敦賀から美濃垂井



八幡神社（石田神社）



多くの石塔が出土した本殿裏



石田一族の墓所：長浜市石田町

石田屋敷跡の東側にある八幡神社は古宮や若宮神社、石田神社とも呼ばれ、石田家の氏神とされる。この境内の一角には、「触ると腹痛を起こす」「掘ると頭痛がする」など、地元で古くから伝承される場所があった。昭和 16 年、この伝説を調査するために、その場所が発掘されると、故意に破壊されたような五輪塔が多く発見された。これらは石田三成の一族に関係するものと思われ、関ヶ原の合戦後、江戸幕府の追求から逃れるために里人によって埋め隠されたものとされる。現在、本殿の裏手に供養塔とその廻りに古い石塔が集められ、三成一族の墓地として整備されている。石田町では、今でも三成の命日に供養祭が行われている。

※7 直江状：原本や写本が現存しないため、後に創作されたものと言われる。上杉謀反の疑いを揶揄を込めてかわし、家康を辛辣に弾劾した書状。武器を集め、城や道路、橋等の修築をしているとの密告に対し、上方の武将は茶器や骨董品などを集めるのが好きらしいが、田舎の武辺者は刀や弓にしか興味がなく、城を整備し、領民の為に道や橋を修理することは、国を治める大名の務めで、これを謀反というのは内府殿（家康）も、もはや躊躇されたか。などと痛烈に皮肉っている。

※8 大谷吉継：1559年（永禄2）生まれ。その出自は近江・豊後の2説があり、定かではない。幼名は紀之介、後に刑部少輔となる。若くして秀吉の近侍として仕え、贱ヶ岳の合戦で「七本槍」に次ぐ武功を挙げ、以後三成とともに秀吉の側近となる。秀吉に「吉継に百万の軍の軍配をまかせてみたい」といわしめたほど、軍事・行政ともに指揮能力に優れていたとされる。石田三成との友情はよく知られ、三成の挙兵の際、状況の不利を説くが、友情のために参戦を決意。関ヶ原では、小早川秀秋の裏切りを予測して、松尾山の麓に布陣した。寡兵でよく防いでいたが、次々と友軍の裏切りで敗走、自刃して果てた。義のために散った名将である。

※9 内府ちかひの条々：家康が太閤の遺命に背いたとする13か条にまとめられた、家康に対する弾劾状。

城に入っていたが、三成に請われて佐和山城を訪れた。

三成は、ここで始めて親友に胸の内を吐露した。吉継は苦笑した。三成の家康打倒の挙兵計画が余りにも無謀で、正気とは思えなかったからだ。秀吉の恩顧は自分も痛い程解るが、秀吉亡き後は家康が天下の主となるのは誰もが認めるところだった。しかし、三成の決意は尋常ではなく、話が長くなるにつれ吉継も本気で説得にかかる。2昼夜二人の議論は続いたが、物別れのまま吉継は一旦垂井城に戻った。垂井城主は平塚為広であったが、この会津征伐では吉継軍の組下として参陣していた。吉継は、この為広と同じ組下で越前の安居城主戸田重政にも密かに相談して意見を訊いた。熟慮を重ねた吉継は、三成の忠義と友情のために命を賭け、三成に与することを決意して7月11日に佐和山城へ向かった。

吉継は三成に加担する条件として、総大将を家康に抗する毛利輝元、宇喜多秀家のような大守を担ぎ、豊臣恩顧の大名を味方に引き入れることを進言した。その上で家康打倒の大義名分を策すため、前田玄以、増田長盛、長束正家の奉行衆と安国寺恵瓊にも書状を送り加担を要請した。毛利輝元に対する3奉行の連署状を認め、使者に安国寺恵瓊が当たった。広島の毛利輝元は、総大将を引き受け、16日には、海路大坂城に到着している。この間の一連の動きが余りにも速く、やはり三成が以前より隠密裏に事を運んでいたのだろう。その翌日には3奉行の名で「内府ちかひの条々」十三カ条（※9）が諸大名宛に送られた。同日、家康に味方する諸将の大坂屋敷が接收され人質として大坂城に軟禁される。この時、細川忠興の妻ガラシャが、人質になることを拒み、自殺を禁じたキリシタンだったため家臣に命じて刺殺された。7月19日、三成ら

の要請に呼応した西軍が、鳥居元忠らが守る伏見城を包囲。21日には細川幽斎が籠る丹後宮津の田辺城を包囲して攻撃を開始。

ちょうど同じ頃、三成挙兵の一報が江戸城の家康のもとに届いた。差出人は何と増田長盛であった。長盛は、万一の挙兵失敗の時を考え二股をかけていたのだ。家康はこの時点で、三成らの結束も確かなものではなく多少侮っていた。21日に江戸を出陣して会津に向かったが、24日に下野小山で伏見城の鳥居元忠からの上方蜂起の書状を受取り、その中身に家康は驚いた。宇喜多秀家を大将とする小早川秀秋、鍋島直茂、小西行長、毛利秀元、島津義弘ら4万にも達する大軍団だった。家康は、ここで三成という男の器量を改めて見直すこととなる。翌日、従軍した諸将を招集して三成の挙兵と妻子が人質になっていることを話した。いわゆる「小山評定」によって、豊臣恩顧の武将の去就をはかった。この軍議の席にいた豊臣恩顧の大名は、福島正則、黒田長政、細川忠興、浅野幸長、加藤嘉明、池田輝政、山内一豊らであった。諸将には去就を躊躇するものが多かったが、福島正則が第一声で家康への加担を表明、続いて山内一豊が居城の掛川城を家康に提供するとまで言い出し、すべての諸将が家康への味方に走った。こうして天下分け目の大戦が始まろうとしていた。

7月29日、伏見城は4万もの西軍に攻撃されていたが、頑強に抵抗して持ち堪えていた。この日、三成は動かない戦況に苛立ち、督戦のため伏見城の宇喜多本陣に駆け付けた。すぐさま軍議が開かれ、翌朝からの総攻撃と城内の内応を促す作戦が決せられた。激しい攻防戦が展開する8月1日の未明、城の東側松の丸の一角から突然火の手が舞った。甲賀衆の一部が西軍に寝返り、城壁の一部を壊し始めた。攻め手は一拳に突入して松の丸、名護屋丸を落とした。こ



大手門跡から望む佐和山（正面中央）



佐和山城石垣



佐和山城跡：滋賀県彦根市古沢町
はじめ近江の守護佐々木氏によって築城された。秀吉の天下統一後の天正18年（1590）頃、三成が佐和山城主となって、5層の天守など大規模な修復、改築を行った。戦闘用に秀でた要害無比な名城だったとされ、それを顧す有名な逸話に「治部少輔に過ぎたるもののが二つあり、島の左近に佐和山の城」がある。関ヶ原合戦後は井伊直政が入ったが、慶長11年（1606）、彦根城築城にともない廃城となつた。その際、原型を留めないほど徹底的に破壊されたという。遺構として彦根城や麓にある清涼寺、龍潭寺に移築されたものが残る。



伏見桃山城：京都市伏見区田中門前町
関ヶ原の戦いでの焼失後、家康が再建したが、1625年に廃城となった。1964年に遊園地のシンボルとして模擬天守が建てられた。現在の城は、2007年に東映が映画撮影に改装したもので、後に京都市が無償で譲り受けた。公園として整備されているが、城の内部は立入り禁止となっている。

れを機に四方の西軍が呼応して三の丸、二の丸と次々と陥落させ、本丸を残して城は猛火に包まれた。本丸に籠る鳥居元忠ら350余名は死兵と化して、何度も突撃を繰り返し全員が討死にした。秀吉が築いた名城は、そのすべてが灰塵と帰し、鳥居元忠以下、松平家忠、内藤家長ら1800余名のほとんどが壮烈な討死にを遂げた。

伏見城を落とした西軍は、家康の東軍を迎撃するために全軍を3軍團に分けた。北陸道方面は大谷吉継を大将とし、伊勢路から東海道を東進する毛利秀元、宇喜多秀家隊、そして中山道を三成が受け持った。その後佐和山城へ戻った三成は、諸大名に対して西軍参加を求めるため精力的に動いた。8月9日、三成は父正継と兄正澄に佐和山城の守備を任せ、大垣城へ向かった。

一方の東軍は、中山道を西上する徳川秀忠軍3万5千、東海道軍の福島正則、黒田長政、藤堂高虎、細川忠興ら4万余が、予想以上の速さで進んでいた。8月22日、東軍は岐阜城に迫ると、城主の織田秀信（信忠嫡男）は重臣らの意見を訊かずにはやり、城を出て野戦を挑んだ。戦上手の福島、池田隊らに翻弄されて、城は翌日には落城、秀信は高野山に幽居した。

三成は、東軍が大垣城へ進軍するのを阻止するため、小西行長とともに安八郡の沢渡村へ進出。重臣の舞兵庫（※10）、杉江勘兵衛（※11）ら約1千の兵を河渡へ布陣させた。しかし、岐阜城攻めに参加しなかった黒田、藤堂、田中吉政隊らが長良川の上流と下流を渡り迂回して、石田隊の側面を攻撃。大軍の不意の襲撃に石田隊は、算を乱した。杉江勘兵衛が殿軍を引き受けながら、自らが討死するまで奮戦し、どうにか大垣城へ撤収した。岐阜城の占領、河渡で勝利した東軍は続々と渡河、大垣城北西約3キロにある赤坂に布陣した。この勝利の報を受けて江戸に居た家康も、9月1日になってようやく

※11 舞兵庫（まいひょうご）：前野將右衛門長康の娘婿。豊臣秀次に仕えていたが、秀次事件の際、重臣で舅の將右衛門が連座して切腹させられたが、兵庫は三成の嘆願で秀吉に赦されて家臣となつた。関ヶ原戦で嫡子三七郎とともに壮烈な討死をした。

杉江勘兵衛（すぎえかんべえ）：もと稻葉一鉄の家臣。姉川の合戦で功名を立て、一騎当千の武者としてその名が知られた。



天下分目の戦いに挑んだ三成

9月14日、家康の本隊約3万が岐阜城から赤坂に入った。家康着陣の報に接した大垣城では軍議が開かれ、三成の重臣島左近が赤坂の東軍陣地への奇襲作戦を提言。諸将の同意を受けた左近は、蒲生郷舎らを率いて杭瀬川を渡り東軍の先鋒を挑発した。これに乗った東軍の中村一栄、有馬豊氏らが出撃、左近は少数の兵で迎撃するが、すぐに退却。川を渡って追撃してきた東軍を伏兵でもって襲撃、大打撃を与えた。勘兵衛たちの仕返しを見事果たし、西軍の士気は大いに上がった。

その夜、両陣営は対峙したまま軍議に入っていた。家康は大垣城攻撃を避けて、佐和山城を攻略して、そのまま大坂へ攻め上る作戦を立てた。西軍では、島津義弘の夜襲案などを協議していたが、その場に東軍の作戦の情報が届いた。この時の西軍の布陣は、大垣城に石田隊、小西

関ヶ原東西両軍の陣形図（開戦時）

① 石田三成	3千8百	① 徳川家康	3万
② 島左近	1千	② 黒田長政	5千
③ 蒲生郷舎	1千	③ 竹中重門	400
④ 豊臣軍団	1千	④ 細川忠興	5千
⑤ 島津義弘	800	⑤ 加藤嘉明	3千
⑥ 島津豊久	850	⑥ 田中吉政	3千
⑦ 小西行長	6千	⑦ 筒井定次	2千8百
⑧ 宇喜多秀家	1万7千	⑧ 松平忠吉	3千
⑨ 大谷吉継	600	⑨ 井伊直政	3千6百
⑩ 戸田重政	850	⑩ 藤堂高虎	2千5百
⑪ 平塚為広	850	⑪ 京極高知	3千
⑫ 木下頼継	3千5百	⑫ 福島正則	6千
⑬ 安国寺恵瓊	1千8百	⑬ 織田有楽斎	450
⑭ 長束正家	1千5百	⑭ 古田重勝	1千
⑮ 長宗我部盛親	6千	⑮ 金森長近	1千1百
⑯ 小早川秀秋	1万5千	⑯ 生駒一正	1千8百
⑰ 小川祐忠	2千	⑰ 本多忠勝	500
⑱ 赤座直保	600	⑱ 寺沢広高	2千4百
⑲ 朽木元綱	600	⑲ 有馬則頼	300
⑳ 脇坂安治	1千	⑳ 山内一豊	2千
㉑ 吉川広家	1千	㉑ 浅野幸長	6千5百
㉒ 毛利秀元	1万5千	㉒ 池田輝政	4千5百

本戦参加数 約3万7千 本戦参加数 約7万5千
裏切り数 約1万9千 不戦数 1万3千
不戦数 1万3千



笙尾山の三成陣地跡



三成陣地内部（再現）



三成の家紋



大谷吉継の陣跡

吉継は、癩を病んで両目もほとんど見えなかったという。関ヶ原戦では輿に乗って采配を振るったとされる。敗戦が濃厚となった時、家臣の湯浅五助に命じて自刃した後に首を土中深く埋めさせたという。吉継の墓は、五助の墓とともに陣跡近くの山中にある。

隊、島津隊、宇喜多隊ら総数 4 万、北陸から転進した大谷隊ら 1 万と小早川秀秋隊の 1 万 5 千が関ヶ原に到着していた。さらに関ヶ原東南の南宮山には、毛利秀元、吉川広家ら 1 万 6 千、その麓に安国寺恵瓊、長束正家、長宗我部盛親ら 9 千がすでに布陣していた。

西軍の軍議は、東軍を関ヶ原で迎え撃つて一举に殲滅する三成案に決し、夜陰に紛れての移動が開始された。この夜、秋の冷たい雨が降り出していたが、行軍は中山道を避けて南宮山の南麓を大きく迂回する道をとり、午前 1 時頃に関ヶ原へ着いた。全軍は布陣を終え、夜を徹して陣地の構築を始めた。この間、三成は南宮山の毛利や長束、安国寺に家康本陣を背後から攻撃する作戦を伝え、松尾山の小早川隊に使いを出し、狼煙を合図に攻撃するように指示した。三成は、過労と冷雨による身体の冷えで激しい腹痛だったが、精力的に動き最後に吉継と綿密な協議を終えて自軍に戻った。

西軍の移動が家康に伝えられたのは、西軍が着陣を終えた午前 2 時頃といわれる。全軍が家康の命令で出陣し、関ヶ原へ到着した頃には暗夜も明けようとしていた。家康は中山道脇の小高い桃配山に本陣を構えた。関ヶ原とその周囲の山々は、いまだ薄暗く雨が降り続く中、両軍の篝火だけが点在していた。

辺りが次第に明けてくると、昨夜来の雨は上がったが、関ヶ原一帯には真っ白な霧が立ちこめていた。視界はほとんどなく、両陣営とも相手の陣形すら掴めず、微かに遠く嘶きが聞こえるだけだった。やがて霧が薄くなり、山々を重く覆っていた雨雲も切れ出すと、両軍の幟旗がしだいに望見できるようになった。

9月 15 日辰の刻（新暦 10月 21 日頃の午前 8 時）、突然、静寂を打ち破る鉄砲の轟音が響いた。東軍の先鋒福島隊の前に進出した松平忠吉（家康の 4 男）と井伊直政の鉄砲隊が、南天満山の宇喜多陣営に向けて発砲した抜駆けだった。宇喜多隊の先陣、明石全登もこれに応射。福島正則は、この抜駆けに激怒して宇喜多隊への総攻撃を命じた。明石全登も自軍を率いて突撃、その統率された兵は福島隊の先陣、可児才蔵隊を圧倒して突き崩した。同時に東西の陣営が先陣を繰出し、兵馬一段となった大喚声が湧き起り、関ヶ原を舞台に激突した。

三成の先鋒左近は押しては引き、引いては押し返す絶妙の采配を振るった。黒田、田中らの兵が突撃してくると、柵に配置した銃隊が激しく銃撃、怯んだところへ騎馬隊と鎗隊が猛烈な突撃を加えて翻弄。宇喜多隊の明石全登も福島隊の先陣可児才蔵を突き崩し、大谷隊の平塚為広、戸田重政も藤堂、京極隊を圧倒していた。家康本陣の桃配山からは関ヶ原が一望できず、ほどなくして家康は本陣を関ヶ原の中央辺りまで移動させた。東軍は、家康の本隊が最前線近くに移ってからしだいに盛返しつつあった。

開戦から 3 時間余は、宇喜田隊、石田隊、大谷隊の奮戦で終始西軍が優勢であった。三成は勝てると踏み、申合せた総攻撃の狼煙を上げさせた。戦闘が白熱した頃合いに、二備えの島津隊を東軍の側面攻撃とし、松尾山の小早川隊が東軍の腹背へ、そして南宮山の毛利隊らが家康



宇喜多秀家の陣跡

宇喜多直家の嫡男。秀家は幼くして宇喜多の家督を相続。秀吉に寵愛され、天下統一に従軍して備前・美作 50 万石の身代に封じられた。後には豊臣政権の重臣となり、秀吉没後の三成の挙兵に与した。関ヶ原の敗戦後、伊吹山中に身を隠して逃亡、薩摩の島津義弘に匿われた。後に、助命されたが久能山に幽閉され、ついで八丈島へ遠島された。そのまま 50 年におよぶ配流生活を余儀なくされて、84 歳の長寿のうちに病没した。



小西行長の陣跡

堺の薬種商の次男に生まれ、始め宇喜多家の御用商人として仕えていたが、後に秀吉にその才能を見出されて兵站や水軍として活躍。肥後半国の大名となる。朝鮮役では、武将としても武功を挙げるが三成とともに積極的に和平交渉を進めた。関ヶ原敗戦後、敗走中に捕えられたが、行長はクリスチャンだったため、自刃せずに三成らとともに斬首された。



小早川秀秋陣があった松尾山

関ヶ原戦では、家康との内応で合戦途中で寝返り、東軍の勝利をもたらし、その功により備前・美作55万石に封じられた。しかし、その2年後に21歳の若さで病死、小早川家は断絶した。裏切り者の烙印を押された秀秋の死は、後世さまざまな風説がある。また、秀秋は気位が高く、気性が激しく戦国武将としての資質には欠けていたといわれる。



島津義弘の陣跡

関ヶ原戦での適中突破は「島津の退き口」として知られる。義弘の甥豊久や家老長寿院盛淳らの身代わりによる壮絶な討死によって、無事に薩摩へ帰還した。逃亡時300余名の家臣のうち生き残った者は80数名だったという。帰国後、徳川の九州攻めに備える一方、家康との和平交渉も行った。一時、家康も島津討伐の軍を送ったが、対峙したまま撤収させた。2年後に、幕府から所領の安堵と家督継承が承認された。義弘は大隅加治木に隠居、83歳の長寿を全うして没した。

の本陣を背後から攻撃する作戦だ。誰の眼にも西軍の勝利は明らかだった。ただ、大谷吉継は、以前より小早川が家康と内応していると見ていた。そのため、裏切りに応戦する小川祐忠、赤座直保、朽木元綱、脇坂安治隊ら4千300の兵を松尾山麓に布陣させていた。

両軍一進一退の攻防が繰り返されるなか、松尾山と南宮山には何の動きも見えない。

三成は、家康は、小早川と毛利家の吉川広家とも裏で取引をしていたが、ここに至って痺れを切らし、鉄砲隊に命じて小早川陣営めがけて一斉射撃させた。秀秋は、家康と約していたが、西軍の優勢を眼下に見て迷っていたため、この家康の怒りに狼狽えた。秀秋は僅かに躊躇したが、全軍に下知して軍配を大谷隊に向かえた。

大谷隊の為広、重政らは、突然、湧き起きた喚声に松尾山を見上げた。その軍団の矛先が、大谷隊に向っていることはすぐに知れた。吉継は、後備えの一団と旗本も一兵残さず迎撃に走らせた。すると小川、赤座、朽木、脇坂らが、小早川隊に応じるように大谷隊の腹背に迫った。この裏切りには、さすがの吉継も驚いた。寡兵の大谷隊は、それでも奮戦し、二度三度と小早川らの大軍を押し返していく止めた。だが2万余の敵は何度も新手を繰り出し、激戦続きの為広、重政らもついに討死して大谷隊は壊滅、吉継も自刃した。

藤堂、京極隊も小早川らと一丸となって、宇喜多隊、小西隊に襲いかかる。東軍の主力と正面で奮戦していた宇喜多隊も、前後両翼から攻められ、陣形は乱れて敗勢が濃厚となった。小西隊に続き、宇喜多隊もついに総崩れとなって敗走。最後まで踏み止まっていた石田隊も、左近が黒田長政の狙撃隊のために負傷して戦線を離脱。すでに舞兵庫らの主だった武将も討死し、本陣を守っていた蒲生郷舎（※12）が辛うじて

防戦していた。三成も自ら指揮して戦っていたが、郷舎が乱戦の中につくった道から伊吹山方面に逃れた。郷舎はわずかな手兵とその場に残り、敵を食い止めて壮烈な討死を遂げた。

午後2時頃、西軍は壊滅的な敗北で関ヶ原に残されたのは夥しい数の遺骸だけだった。その中で、黒い一群が家康の本陣めがけて動いていた。手薄となっていた家康の本陣に突撃したのは、島津隊だった。この大胆不敵な前方突破の逃走に、家康は危うく首を討たれるところだった。島津勢は、井伊、本多勢などの追撃軍と激戦を交わしながら、豊久の奮戦によって義久を守って戦線離脱に成功した。家康が諸将を集合させて、首実検をしたのが午後5時頃とされる。翌日に逃亡した三成ら西軍諸将の探索と、佐和山城攻撃が開始された。難攻不落の佐和山城も内部の裏切りから2日で落城、父正継と兄正澄らは自刃して果てた。

三成の逃亡ルートは諸説あるが、およそ伊吹山麓の東側から北へ大きく迂回、姉川を渡って東浅井郡の草野、伊香郡の高野村（現：高月町）から高時川を北上して古橋へ入ったとされる。従った家臣は磯野平三郎、渡辺勘平、塩野清助の三名だったが、草野村付近で三成に諭されて別れたという。三成は、古橋村のある村人に匿われ洞窟に潜んでいたが、逃亡6日目に追手の田中吉政の手兵に見つかり捕縛された。三成は恩を受けた村人に罪がおよぶのを潔し良しとせず、役人に連絡させたという。

9月22日に大津城まで護送され、家康と会見。その後、大坂に送られて小西行長、安国寺惠瓊とともに市中を引き回された。さらに京都に護送されて、10月1日に都大路を引き回された後、京都六条河原で斬首された。三成の遺骸は、大徳寺の住持春屋宗園に引き取られ、三成自身が創建した塔頭三玄院の墓所に葬られた。



妙心寺寿聖院（じゅしょういん）

三成の墓所は妙心寺もある。三成の子、重家は関ヶ原の敗戦時、大坂城にいたが三成の敗北を知ると菩提寺の一つであった京都の妙心寺寿聖院に駆け込んだ。和尚の伯蒲恵陵が重家を剃髪させて仏門に入れた。すぐに京都所司代奥平信昌に届け出、家康の赦しを乞うた。重家は家康に赦免されて、祖父正継、三成をはじめ一族の墓を建てその生涯にわたり菩提を弔った。

（右京区花園妙心寺町）

※12 蒲生郷舎（がもうさといえ）：

関ヶ原で討死したのは蒲生郷内（頼郷）という別人との説もあるが、ここでは郷舎とした。生年は定かではない。始め蒲生氏郷に仕えていたが、氏郷が病没すると三成に仕官した。